

安田純生選

歌

首

文語体の定型短歌を詠むのを常としている作者の作品から、多くを選んだ。口語表現を原則としている作者、たとえば口語自由律短歌の歌人の作品は一割ほどにとどめた。この特集が、文語体のなかの口語表現に主眼を置いていと思われるからである。また、最近刊行された歌集を重視している。口語発想の歌といっても、ある意味で、現代短歌のほとんどはそうであるともいえるのだが、口語を現代語の体系と

いう意に解し、その語法に一首全部か、大部分が換っている歌を掲げるようにした。もちろん、文語と口語とは完全には対立するものではなく、口語表現が即ち非文語表現であるとは限らないし、文語表現が即ち非口語表現であるとはいえない。文語体の歌ともいえるし口語体の歌ともいえるような作品が、いくらでもある。

暗い、暗い、とわめていっている体を、明るい日のなかに持出してやる

「水源地帯」前田 夕暮
心と体が分離しているという意識にもとづく。「暗し暗しとわめける体」では実感に遠くなるようである。

朝はやく出て来たわれはこの原のまつさをな空に顔をふれる

「シネマ」石川 信雄
空が近く感じられ、その空によって心が晴れやかになったのである。口語により、爽やかさが強く出ている。

初々しく立ち居するハル子さんに会ひましたよ
佐保の山への未亡人寄宿舎

「山下水」土屋 文明
かなりの字余りだが、口語表現のためもあるて重く感じられない。「ハル子」と「佐保」とが響きあっている。

突撃はいやだいやだ——立上ると肩をすぼめ足踏みをしていはれた位置へ歩きだす

「夏雲」宮崎 信義
自由律の作品。厭戦の歌といえるだろう。こういった気分は文語表現であらわしくいいたくはない。

唄はれてゐるに違ひない春の夜を鏡の中で口笛を吹く

「宇宙塵」加藤 克巳
第二句で切れていると解した。もっとも、「ない」が「春の夜」にかかっていると解しても不都合ではない。

例えば 羊のようかもしれないぬ草の上に押さえてみれば君の力も

「顔をあげる」平井 弘
「しれぬ」の「ぬ」を文語的だと思ふ人が、とくに関東の人にいたるかもしれないが、「ぬ」は非口語ではない。

太陽がけさもすこやかに微笑して街屋根の上をあるいてくるよ

「遍歴者」安田 青風
朝日の印象を明るく軽快に歌っている。ただし、この太陽は孤独な太陽でもあり、淋しさがわからないわけではない。

冬山は影ふかく刻み人はまた少し嘘つくさびしくないか

「明日を責む」安田 章生
「冬山」は雪の積もった山ではあるまい。「人」は他人であると同時に人間一般の意も含めているのであろう。

なめらかな肌だったつけ若草の妻ときめてたかもしれないぬ掌は

「群衆」佐佐木幸綱
口語表現、というよりも話し言葉のなかに挿入された「若草の」という古風な枕詞が生きている。

たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

「森のやうに獣のやうに」河野 裕子
「ぬ」が非口語でないことは前述した。また、「やうに」は非文語的な表現ではないが、口語歌と見ていいだろう。

こんなところに釘が一本打たれていじればほとりと落ちてしもうた

【右左口】山崎 方代
釘に命があって、やっそこさつと生きていたかのようである。「しもうた」が大きな効果をあげている。

おいとまをいただきますと戸をしめて出てゆくやうにゆかぬなり生は

【ひたくれなゐ】斎藤 史
初句から口語調で詠んできて、結句だけ「なり」という文語助動詞を用いている。それによって引き締まった。

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人みな前を向く

【三齡幼虫】奥村 晃作
口語表現とも文語表現とも受け取れるが、ことばの運びが口語表現であることを示していると思はれる。

「この味がいいね」と君がいったから七月六日はサラダ記念日

【サラダ記念日】俵 万智
「いったから」を「いへるゆゑ」「いひしゆゑ」「いひつれば」などとしたら、作品の世界は台無しである。

もうゆりの花びんをもとにもどしてゐるあんな表情を見せたくせに

【サニー・サイド・アップ】加藤 治郎
いろいろな解釈が可能であるところに、おもしろさがあるといえよう。読者を楽しませてくれる歌である。

朝の陽にまみれてみえなくなりそうなおまえを足で起こす日曜

【シンシケート】穂村 弘
どこかに消えていってしまふような異性を捉えている。ここでは詳しく説けないが、物語的な一首。

男ひとり杭になつて佇っている海風やまかせまじわるところ

【木風浄土】沖 かなも
男が寂しそである。「男」「杭」「まじわる」ということばの続きに、男女間のことと連想される。

夕まぐれもつとも気遠きひとときは不味い紅茶をすすつてゐたい

【晴明悲歌集】島田 修三
文語体の言い方も混じっているが基本は口語。紅茶がうまいと、それにこだわが生じるから、というのであろう。

さういふなら君の兩掌でみどりごのくれなるの耳ちぎつてごらん

【風雅默示録】塚本 邦雄
一読してドキッとするような毒を含んでいる。文語表現にすれば毒は薄められてしまふにちがいない。

両腕にさかなの動く気配して目覚めるついたち日曜の朝

【素足のジュビター】小守 有里
第四句の「目覚める」が「目覚むる」であれば文語体の歌となり、一首全体の印象が異なってくるはずである。

陽を仰ぎまなこつぷりでおれるときばあーんばあーんどうでもよくなる

【じゃがいもの歌】落合けい子
「おれる」(これは四段の「おる」に「り」を接続させた形)だけが文語体。ぼあんとした感じも口語が似合う。

スタンドのあかりの端に酒を飲むわれひとりには広すぎる部屋

【家長】小高 賢
「広すぎる」が口語になっているというより、この語によって全体が口語調となったと見るべきであろう。

腋にけむるけむりを刺つて三十代半ばはふつとわれに來ている

【ブラチナ・ブルース】松平 盟子
ちょっととしたエロティシズムと倦怠感が感じられる。文語にすれば、そういったものが出にくいのではないか。

情感はふつふつ溢れ愛となる三步手前で揺れています

【風の婚】道浦母都子
第三句の「なる」は連体形のはず。歌謡調になっているところ、「二歩手前」までいっていないところがおもしろい。

鳴いてゐる蟬がぼとりと木から落ちるほどの暑さぞ今年の夏は

【水行】高野 公彦
上三句は口語で軽いつたのがよく、文語体になると、比喻のリアリティーが乏しくなりそうである。

すうどんのねぎの青さは空のやう すうどんと空 兵と空腹

【疵が国大阪】池田はるみ
すうどんの素朴さが戦争直後のことを連想させるものだろう。「やう」でとめるのは口語と見えていい。

在ることをもうかんべんしてもらひたいなど頼むには神様が要る

【からだまだある】浜田蝶二郎
老いたる者の寂しさがにじみ出ている。口語表現が気持ちの切実さを伝え、ここでは軽さが重さでもある。

味のいい鴨があんなに騒いでらあなたを見えぬ彼方に置いて

【ウランと白鳥】岡井 隆
万葉歌の訳の形をとっている歌。一読、笑ってしまった。口語は、直ちに理解できるだけに俳諧歌にも適している。

痩せ痩せて私を待っているだろうその手のひらを握りにゆかな

【サンセットレックス】飯沼 鮎子
待っているのは「手のひら」である。結句に文語の「な」を持ってきたところは、前引の斎藤史の歌と同様である。

どんぶりに顔を吞まれて下の子がうどんを食べる、食べるよろこび

【獅子座流星群】小島ゆかり
幼い子供なので顔が見えなくなっているわけだが、いかにもうまそうに食べているような感じがする。